

内藤千珠子著『「アイドルの国」の性暴力』を読む*

A Note on NAITO Chizuko's *The Idol Nation and Its Sexual Violence*

ファン・ジュンリャン

Junliang HUANG

カリフォルニア州立大学ノースリッジ校人文学部
California State University Northridge, College of Humanities

キーワード

性暴力 身体 「共鳴のフレーム」

Keywords

Sexual violence; The body; Frames of resonance

原稿受理日：2023.2.17.

Quadrante, No.25 (2023), pp.41–46.

目次

1. 「国民的」なアイドルと世界的な「クールジャパン」
2. 娼婦の身体と「慰安婦」をめぐる暴力
3. 「共鳴のフレーム」

内藤千珠子著『「アイドルの国」の性暴力』は二部から構成され、第一部ではアイドルを中心に、第二部では慰安婦を中心に捉え、それらに通底するナショナルな暴力、恥、傷、記憶といった問題を、物語定型に対する批判を媒介に丁寧に取り上げている。著者は、そのような物語定型がいかに帝國的性暴力の論理によってのみ受け取られ拡散され、そしてそれがいかに女性を分断する構造を作り出すかを指摘し、批判する。つまり本書は、「現代の暴力を支えるナショナリズムの形式を検証するために、女性ジェンダー化された身体の被傷性に依存する暴力が、代理や代行という動力によって物語の姿をとる諸相を、『アイドル』と『慰安婦』という

二つの記号を媒介として考察」している（本書268ページ。以下、ページ数のみを表記）。さらに著者は、前作の『愛国的無関心：「見えない他者」と物語の暴力』（新曜社、2015年）のなかで論じられた、具体的な他者に対する関心の欠如からできている近代日本の「愛国的無関心の回路」という概念の延長線で、他者と自分との間の境界線をいかになくして「共鳴のフレーム」を作り出すかという問題へと転じ、アイドルと慰安婦の身体から女性全体の身体へと移りながら「彼女たち」と「私」、「私」と「あなた」、「私たち」と「私たちの外側」との間の境界線を破り、物語を受容する側での共感・共鳴・共同体意識を喚起させようとする。私は一読者としても、ジェンダー・スタディーズの研究者としても、著者のそういった思考と実践に深く共感し、感心しながら本書を読んでいた。

* 本書評は、2022年2月20日に開催された内藤千珠子著『「アイドルの国」の性暴力』（新曜社、2021）書評会（WINC (Workshop in Critical Theories)、Gender and Criticism Workshop、東京外国語大学海外事情研究所共催）における報告を踏まえて書かれた。



1. 「国民的」なアイドルと世界的な「クールジャパン」

本書の冒頭部では、まずはアイドルを地方経済の活性化や国家の文化・経済戦略に利用し、アイドルへの欲望を一般化した日本の社会環境が指摘される。それは資本主義的な構造のもとでアイドルの性的消費と搾取が促されるような環境であり、そのような暴力的な消費と搾取から目をそらし、見ないようにすることがふつうになってしまう社会でもある。

一方では、比較にさらされ、競い合わされている「未熟な」アイドルたちの「卒業」までの成長を見守るファンたちは、ライブ活動に参加したり、ソーシャル・メディアで彼女たちをフォローしたりすることでアイドルと共有する世界を作り出そうとする。と同時に、「現場」に来てくれたファンの眼差しを浴びて、ファンの人数で自分の人気を把握していくアイドルもそうやって自分のイメージと位置を確認する。

しかし、そのような一見「双方向的なコミュニケーションの場」（26ページ）では、アイドルの身体やプライベートな生活がネット上だけではなく、現実の空間の中でも公的にさらされ、商品として消費の対象にされる。会いに行けるアイドルが会いに来る生身の見知らぬファンの男性に追われ、触られ、覗かれ、性的に扱われて傷付いていく。また、アイドルとファンの共同体という視座から作られたアイドルの物語を経由して、ファンたちは現実の自分が戦えなかった分、頑張れなかった分をアイドルに代行させ、本当の自分の傷から逃げて、他人の傷からも目をそらしながらそこに依存することになる。それは、他人の傷も反復的に深めていくことでもある。そのような構図を作ったのはほかでもなく、現代化された「帝国的性暴力」の様式（39ページ）だと著者は鋭く指摘した。つまり、女性身体を損傷・消費しながら不在にすることによって、ナショナルな共同体（49ページ）を構

築していくという構造である。

むろん、本書で示された帝国的性暴力の論理と愛国的な情動や現代のナショナリズムを成り立たせる原動力は、「アイドルの国」としての日本が単独で作ったものではないし、女性ジェンダー化された身体に傷や恥を代理させながらその被傷性に依存する構図が存在するのは日本だけでもない。著者も言及している、世界市場に日本文化を売り出すための「クールジャパン戦略」（20ページ）が示したように、日本の「国民的」なアイドル文化やそれを生み出す社会環境は国際社会と日本とのあいだの力学において考えなければならないし、アイドル文化も国民的枠組においてだけでなく「世界的」な視座から考察しなければならないと思われる。たとえば「クールジャパン」の概念を最初に名付けたのはアメリカ人の新聞記者 Douglas McGray であって、日本政府が国策として作ってきた「クールジャパン」という文化・経済戦略は、ナショナリズムを軸とはしているのだが、そのナショナリズムは「西洋」という「他者」の目線を内面化した結果でもあるだろう。また、アメリカを例にとると、日本が世界市場に売り出したアニメや漫画、ゲーム、コスプレイ文化、アイドル文化などを消費しながら十代、二十代を過ごしたアメリカの若い世代は、そういった文化のなかに溢れている女性ジェンダー化された身体の表象には全く気がつかないはずがない。なのに、アメリカ社会でのジェンダー差別を激しく糾弾する若者たちでも、それにたいしては批判的な姿をいっさい見せない。むしろアニメや漫画が代表する「日本文化」、「萌え文化」などをファンタジー化・例外化して、情熱的に消費していく人がほとんどだろう。評者が担当する日本文化や日本社会の授業で、アニメ好きな学生たちにその理由を聞いてみると、「退屈な日常から逃げることができるから好きだ」という答えに賛成する人がつねに大半である。

ここではまさに、女性身体の表象を暴力的に消費・搾取することで自分の傷から逃げ、他人の傷から目をそらしながら依存していくという「帝国的性暴力」の様式が働いているのである。このような「アイドルの国」を応援する世界的なオーディエンスが、いかに「クールジャパン」の言説で定型化されてしまった女性たちの身体を求め、消費し、捨ててきたのだろうか。それはまたアイドル文化を生み出す日本の社会環境にはどう関係していくのだろうか。いずれも「帝国的性暴力」の様式の働きについて考察するには興味深い問題だと思う。

2. 娼婦的身体と「慰安婦」をめぐる暴力

女性身体をめぐる言説のなかでは、「娼婦的身体」は「母の身体」と対立させられ、性的な欲望を誘う一方で、中傷や侮辱の対象とされる物語定型の一つとして現代社会に定着している。本書では、女子高校生やポルノグラフィ女優の例も含めて、「伏字的死角」としてしか存在しない女性身体に強いられた「娼婦性」とそこから生まれた被傷性、そしてその傷を隠蔽してしまう社会的構造が指摘された。

「伏字」のシステムについて、著者は前著『愛国的無関心』に続いて本書では女性身体という記号に結びつけて説明した。伏字とは、政治的あるいは性的な禁止を受けそうな表現を含んだ文章の一部を出版する側があらかじめ自主的に読めないようにして、読者共同体に「暗黙の了解」（43ページ）を求める手法である。そうすると、事実は語られないまま、性的な視線を誘発する一方で、関心をもたずにも済むようなものにされてしまう。これを性的なイメージをもつ女性身体に重ねて考えると、女性身体がいかに「伏字的死角」（45ページ）にされてきたのかは明らかだろう。すなわち、女性身体をめぐる「暗黙の了解」はセクシュアルな想像力を刺激しながら、女性身体を「無視され、一方

的に意味を補充してもかまわない」（45ページ）のような、受動化・対象化された存在にするのだ。

たとえば植民地支配、戦争や軍隊の進出に常に付随する公娼制度においては、「伏字的死角」になった娼婦の身体がその中心に置かれている。国辱、男性の恥辱、そして帝国・家庭の内部にいる女性の恥など、さまざまなレベルと形で生まれた「恥」という情動を、身体を売ることを強制された女性たちに代表させ、他者化することで、不可視化していくことは、本書のなかで、複数の物語をとおして議論されている。著者が第一章で提示した他人の「傷」を代理させられるアイドルをめぐるメカニズムと同じように、ここでも娼婦の身体が他人の「恥」を代理させられるうちに、伏字的な存在になり、恥の情動を原動力としたナショナルな共同体を、支えながら排除されていくのである。同じメカニズムで、JK（女子高校生）が代表する少女の身体や「AV女優」の常に性的暴力にさらされて公的に見られている身体も、彼女たちが属してもいないナショナルな共同体を支える他者になる。そのことで、娼婦的身体を暴力の宛先としてつねに必要とし、その傷や恥に依存しなければ維持していけないシステムの存在を提示してくれるのだ。

女性身体の被傷性という普遍的な視座から議論を広げていくジェンダー・スタディーズの研究は少なくないと思うが、一方で、アイドルを「慰安婦」につなげて同じ地平で両者を議論するものは少ない。これは著者のオリジナルなアプローチであり、「アイドル」と「慰安婦」をめぐるそれぞれの物語定型にチャレンジする勇気の要る試みでもあると思う。とくに著者は、「慰安婦」をめぐる暴力の構造を私たちの日常のなかに潜む性暴力や性差別との連続性として提示し、「帝国的性暴力」のもつ、理念の上での差別的な切断と現実的な連結の両義的力学

を同時に考える」(149ページ)ことの必要性を示してくれた。もちろん、著者が「慰安婦」(＝性奴隷)の「娼婦的身体」を女性身体の被傷性と連続性という視座から提示したのは、「慰安婦」を「売春婦」と同一視するからではなく、植民地公娼制度における「売春婦」が実質的な性奴隷だからである。「暴力の宛先になる女性身体は、その被傷性においては連続させられている」(149ページ)ため、「売春婦」と「普通の女性」を分断する境界線を引くことはできないし、むしろ私たちの「日常」はそういう性暴力の構造をベースにして組み立てられているのだという著者の主張がとても印象的だった。

しかしながら、アイドルも「慰安婦」も帝國的性暴力の構造において性的な身体とみなされ、消費されてきた娼婦的な身体イメージを象徴する記号であり、女性身体はその被傷性でつながっている一方で、その被傷性が示す具体的な「傷」の様相は、重なる時もあれば異なることも必ずあるだろう。たとえばアイドルの身体は憧れや羨望される身体・性的な視線で見つめられる身体であったり、「JK」や「AV 女優」の身体は性的に消費される身体であったり、革命のヒロインの身体は危うい身体であったり、「慰安婦」の身体はつねに監視・管理されて、殺される緊張感と恐怖に包まれる身体であったりして、それぞれが置かれた環境とのあいだの力学はだいぶ違う。だとすると、たとえば経済化された「JK」少女の身体と慰安所に閉じ込められた「慰安婦」少女の身体とは、それぞれがもつ主体性(あるいは主体性の欠如)を同じ性暴力の力関係に置いて想像し、議論することはどこまでできるのだろうか。また、もしそれらの女性身体からも革命の可能性が見出されるとすれば、彼女たちは革命のヒロインと同じレベルで能動性を発揮させられるものだろうか。「不在」にされる女性身体とその傷の重層性をどう考えればいいのかも、一つの重要な課題だと

思われる。

3. 「共鳴のフレーム」

著者が本書で名付けた「共鳴のフレーム」という概念は、とくに世界中がヘイトの時代に入ったような現在においてはとても重要で勇気のある呼びかけだと思う。「暴力から隔たるための思考のフレーム」(76ページ)を見出そうとする著者はまず「他者に依存する者の視点、すなわち暴力を行使する『近代的主体』の側」(76ページ)から視野を広げて、自分の傷や痛みを他人に代行させ、自分が「透明人間」になることはいかにその傷と痛みを反復的に深くしていくのかという問題を提示してくれた。たとえば本書で取り扱われた横田創の短編小説『残念な乳首』のなかでは、相手の女性の裸体をポルノグラフィ的な視線で眺めて、消費していくなかでその女性を失い、同じ「暗黙の了解」によって意味づけられた元グラビアモデルの「わたし」の傷や恥ずかしさも反復されていく。だが、物語はそこで終わることなく、主人公の「わたし」は「女の現実そのものの身体」(104ページ)に戻り、トラブルや衝撃を引き起こすような表象にカメラを向けるようになったのだ。物語の言語がもつ想像力をとおして、著者がここで見いだしたのは、「未来に向かう重要な契機」(105ページ)なのである。

その未来に向かう瞬間には、物語の主人公の「わたし」に共感・共鳴する読者の「私」もいる。著者が本書のなかで構築してきたのは、「敵」と「私」という分断のロジックに従う「戦争のフレーム」に対して、連続性を可視化する努力としての「共鳴のフレーム」なのである。「共鳴のフレーム」のなかでは、「定型のコードが促す正しい意味、一元的な意味だけではなく、定型の綻びやノイズ、定型からの逸脱、定型への反発も含めた複数の意味が伝達されている」(135ページ)。つまり、定型によって奪われて

しまった複数性に注目することで、物語の定型のみならず、その矛盾や破綻、ノイズなどを示すいわば「他者の声」を聞き取ることができるし、「自分の存在を複数の可能性のなかで思考する」こともできる。著者が書いたように、「共鳴のフレームから見えるのは、物語と脱物語とが同時にそろって並び立った、文学的想像力の作用する世界」である(139ページ)。その世界は、小説『残念な乳首』の終わりのように、我々に「未完の可能性」を示しているのである。

では、この「未来に向かう重要な契機」は、過去の過ちや誤解にもう一度戻り、やり直す契機にもなるのだろうか。『残念な乳首』の主人公は、温泉旅館の露天風呂で母親の裸体を目撃したことを「トラウマ」といい、「あのセルライトのかたまりが、自分の母親だとは思えなかった」ほどの衝撃を受けたと述べる。そして物語は、「わたし」は知らない女の人の「残念な乳首」の写真を撮るようにはなったものの、母親の「残念な裸体」を回顧することは一度もないままで終わった。しかし、「共鳴のフレーム」は、外側へ、未来へ広がっていくと同時に、内側へ、過去へと向かって、トラウマをもう一度思い出して処理する力ももっているはずではないか。『残念な乳首』では、そのような世代間のつながり、つまり母と娘の身体は「共鳴」できなかったように思われる。翻ってそれは「共鳴のフレーム」の流動性と不安定性を表しているともいえよう。「共鳴のフレーム」は共同体に近いところもあるかと思われるが、ある固定的なアイデンティティに縛られることはなく、思想・情動のフレームとして強調されているように思う。固定したアイデンティティではないため、その「フレーム」にはいつ、誰が入ってきてもいいし、いつ、誰が出ていってもおかしくはない。つまり、「私たち」の間だけではなく、「敵」にみえる相手と自分との間の連続性も見出そうとするこの「フレーム」も、常に他者としての定型によってそ

のかたちや限界が変わっていくのだと思う。

であれば、「共鳴のフレーム」のなかにいる私たちの暴力に対するポジショナリティはどういったものだろうか。それについて著者は「物語の定型が伴う暴力から離れた視点に立って世界を眺める」(111ページ)ことを強調し、「慰安婦」などの証言を聞くときには、「勝手にわかったつもりにならず『分かって努力すること』で生まれる共感』に向かう」(206ページ)べきだと主張する。しかし、富山一郎が『暴力の予感』(岩波書店、2002年)のなかで「殺された死体の傍らにいる者が獲得すべき暴力に抗する可能性」を提示するときに述べたように、「ほとんどすべての人が、死体の傍らにいる。人は、死体に一体化することも、死体から逃れることも、できない」(富山13ページ)。「共鳴のフレーム」には暴力の構造的連続性も内在しているし、それに抵抗しながら共鳴・共感し、わかりあうことが求められている以上、暴力から離れることも、人の傷の外部にいることもできないのではなかろうか。

最後に「伏字的死角」に戻ってもう一度考えてみると、伏字として隠されたのは文字なのだろうか、何なのだろうか。自己審査で伏字にして隠したいのは一つ一つの特定の文字というより、むしろメッセージのほうだと思う。つまり、文字それ自体が検閲の対象になることは稀で、多くの場合、文字がある順番で組み合わせられ、その組み合わせが伝えるある特定のメッセージが禁止されるのだ。だから、どの文字も一定の文脈や文章に置かれれば、伏字にされる可能性はある。そういう意味では、「伏字的死角」に閉じ込められた一人一人の女性身体も、女性の誰でもありうるだろう。だが、それにもかかわらず、読まれては不都合な、何かコレクティブなメッセージをたしかに伝えてもいる。別の言い方をすると、「審査」を行う側(この場合では帝國的性暴力を正当化・不可視化する社会構

造全体のことを指す)が隠蔽しようとする女性身体に潜んでいるある集団的な力は、伏字扱いされることで、その曖昧だが力強い存在が逆に確認されてしまうのだ。すなわち、「伏字的死角」となった女性身体は語らない、語られない、語ってはいけないメッセージとして、勝手に作られ、勝手に犠牲にされたものである一方、何か恐るべき力をもっていて、そしてその事実も、「共鳴のフレーム」が抵抗しようとする「暗黙の了解」に入っているのではなかろうか。